
流れ星に願いを

煌電

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流れ星に願いを

【Nコード】

N8328U

【作者名】

煌電

【あらすじ】

数十年に一度、『七夕の夜空にどんな願いでも叶う』と言われている虹色に輝く流れ星が見られるという、そんな夢の様な伝承がある街。事故で植物人間となった主人公は与えられた力を使い、自らの願いを叶える為に戦うことを決意した。

プロローグ（前書き）

この物語はフィクションです。

プロローグ

俺は、数十年に一度、『七夕の夜空にどんな願いでも叶う』と言われていた虹色に輝く流れ星が見られるという、そんな夢の様な伝承がある街に住んでいる。

願いが叶うかどうか真実は分からないが、虹色に輝く流れ星が見られるのは本当らしい。

しかし、その流れ星が見られる周期は決まっておらず、だから伝承を信じたり、期待するなんてことはしていなかった。

そう、あんなことが起きるまでは……。

その運命の日の朝は、何の変哲も無く普通に始まった。

家族と挨拶を交わし、いつも通りのボサボサ頭を鏡を見て顔を洗い、朝食を食べて家を出る。

欠伸をしつつ満員電車で揺られて、学校前の駅で降りる。

遅刻しない程度にゆっくりと学校まで歩き、下駄箱で靴から上履きに変え教室に向かう。

友達と挨拶を交わしつつ自分の席へ向かい、ホームルームが始まるまで、近くの席の誰かとたわいのない話をする。

そうして、つまらない授業をやり過ごし、学食で友達と昼食を食べて午後の授業も耐え抜くと放課後になった。

背伸びをし、この後の予定を考えていると、漫画の新刊の発売日であることを思い出し、本屋に行くことにて学校を出た。

俺の記憶は何故か此処までしか残っていなかった。

一話（前書き）

この物語はフィクションです。

一話

真っ暗闇の中、誰かの声が聞こえような気がした。

その声に導かれるようにして俺は目覚めた。

目覚めたと思ったのだが、目を開けようとしても何故か閉じたまま、目の前は真っ暗闇のまま。

ならば、手を動かしてみようとしたのだが、これも思い通りに出来なかった。

足、頭、口、身体、色々と試してみたが、何一つと思い通りに出来ず無駄に終る。

（夢なのだろうか？）

そんなことを考え始めた所で、スライド式のドアが開く音を聞く。慌ただしい足音を響かせ、誰かが近付いて来るのが分かった。

スライド式ドアの音がしたのを不思議に思いつつ、母さんが寝坊しそうな俺を起こしに來たのだと思った。

俺の身体を揺さぶりつつ、母さんが名前を呼ぶ。

「尋、起きなさい。早くしないと遅刻するわよ」

これでやっと目覚めることが出来る、と思ったのだが先程と同じで思い通りに動くことは出来なかった。

そのまま暫くすると、母さんの声が段々と震えていくのを感じる。学校に遅刻する程度で泣くなんて大袈裟過ぎる、と思ったのだが、

母さんの次の一言で混乱してしまう。

「尋、尋、どうして貴方が事故にあって、こんな酷いことに……」

（事故だって？ 俺が？

そんな記憶は……）

記憶を探っていく内に思い出した。

思い出した、というよりは気付いたのだ、学校を出た後からの記憶が無いことに。

多分、事故の所為でその時の記憶が無くなっているのだ。

事故で身体が自由に動かすことが出来ないよりも、これから先も寝たきりのままで、家族の負担になってしまふことが悲しかった。

そんなことを考えている内に、母さんではない誰かの声が聞こえた。

何と言っているのか、はっきりと分からないのを酷くもどかしい気持ちで聞いていると、真っ暗闇の中に薄緑色の光が差し込み始める。

光が差した途端、先程までと違い、声のはっきりと聞こえた。

『私の声が聞こえますか？』

聞こえたと思っていたが、エコーの掛かった声が頭の中に直接響いている感覚だった。

不思議な感覚に戸惑っていると、また同じ言葉が頭の中に響く。

このままだと、ずっと同じ言葉を聞くことなるかも知れないと思い、不安に感じつつも、声に答えることにした。

「ちゃんと聞こえてる」

『良かった。このまま同じ問い掛けをずっと続けなければならないのかと……』

どうやら思った通りだったみたいだ。

何か返事をしようとする前に次の言葉が響く。

『現状を理解していますか？』

「事故にあつて身体を自由に動かせない、ってことなら分かる」

『そうですか。簡潔に説明しましょうか？』

その言葉に直ぐさま頷く。

けど、身体が動かないのを忘れていたので、伝わったか不安だったが杞憂に終わった。

『学校帰りに事故、病院に運ばれ治療するも植物人間に、事故から三日後の病院のベッドの上です』

本当に簡潔だった所為か、あまり驚きはしなかった。

けど、これで身体が自由に動かない理由と今居る場所は分かった。

しかし、この不思議な状況については何も分からない。

「質問があるんだけど、良い？」

『ええ。どうぞ』

「もしかして、お迎えに来たのか？」

植物人間と会話出来るような人物は神様ぐらいなものだろ？」

神様を人物と言って良いのか分からないが、それしか思い付かなかった。

『お迎えでは無いですが、私は神様の使いみたいな者ですね』

（お迎えじゃないのか？

なら、一体何だ？）

今まで普通に会話していたが、急に寒気がした。

そもそも、本当のことを言っているのか、自分自身では判断出来ないのが怖かった。

『どうやら、不安にさせてしまったみたいですネ。』

では、事故の追体験と今居る病室の様子を見せましょうか？』

（どうする？ このまま何も答えず、帰るのを待つ？

それとも……）

そのまま一、二分程悩み、決意した。

「見せてくれ。ただ、事故は追体験じゃなく映像にしてくれないか？」

追体験だと痛みとか、色々感じそうだったので遠慮したい。

『では、事故の映像を見せますね』

その言葉とともに、俺の意識は次第にフェードアウトしていった。

映像を見て一番始めに感じたのは、一人で歩いている姿が少し猫背気味だったから、今度から気を付けようだった。

しかし、学校から出て来る自分を見ているのは、何とか違和感が凄かった。

そのまま学校の門を潜り、同じ学校の生徒達に混じりつつ、駅前通りの商店街に向かって歩いて行く。

赤信号から青信号に変わり、横断歩道を進んだ時、それが起こる。甲高いブレーキ音を響かせトラックが突っ込んで来た。

俺は驚いた顔をしつつ走り出すが、慌てた所為か足が纏れて、コケそうになっていた。

そのまま体勢を持ち直せず、突っ込んで来たトラックと衝突する。トラックは衝突した衝撃で何かで横転し、俺は五メートル程の距離を転がり、頭から血を流して倒れていた。

『事故の映像はこれでお終い、次は病室の様子です』

その声が響き、また俺の意識は次第にフェードアウトしていった。

まず視界に入ったのは、包帯が巻かれた自分の顔だった。

顔から段々と離れていき、病室の全体が見えるようになった。

病室は個室らしく、白いベットは一つだけで、点滴が左横、右横には心電図モニタがあった。

左横の点滴からは伸びたチューブ、右横の心電図モニタからは何本ものケーブルが、ベットの中へ入っているのが見える。

多分、チューブは左腕に針が刺さって、点滴の中の液体を身体へ送り、ケーブルの先の電極は身体に繋がっている筈だ。

そんなことを考えつつ、母さんが病室の中に居ないのに気付く。

その時、花瓶を抱えた母さんが病室に入ってきた。

花瓶の水でも取り替えたのか、花を入れ替えたのだろう。

母さんは驚れてはいなかったが、眼は充血していて、化粧で隠してはいるようだが、それでも分かってしまう限を作っていた。

母さんの姿を見ていると胸が痛む。

もう良い、と言おうと思った途端、意識がフェードアウトしていった。

『どうでしたか？』

信じて頂けました？』

事故の映像と病室の様子を見せて貰った俺は、力無く頷く。

「ああ。神様の使いだと信じるよ」

『では先の問いに答えますね』

「問い？」

『お迎えなのか？ ということに関してです』

映像とかの所为で、すっかり忘れていた。

『貴方が植物人間から元通りになれるチャンスを持って来ました』
理解出来ず、おうむ返しに聞く。

「チャンス？」

『ええ、チャンスです。どうしますか？』

混乱していたが、先を促すことにした。

「もっと詳しく教えてくれ」

『この街の伝承と言えば分かりますか？』

「願いが叶う虹色の流れ星……」

まさか、真実なのか!？」

『真実です。選ばれし者だけが願いを叶えることが出来ます。』

ただ、試練に合格しなければなりません』

やはり、簡単には願いを叶えたり出来ないらしい。

けど、植物人間から元通りになれるなら、やってみる価値はあり
そうだ。

「その試練に挑戦させてくれ」

『後悔しませんか？』

その問い掛けは、まるで後悔することが確実に起きるみたいな言
い方だった。

けど、何もしないで後悔するより、行動して後悔する方が、良い
と思った。

「後悔しない。例え、後悔したとしても大丈夫だ」

『良い返事です』

では、貴方の名前を教えてください』

身体はやはり動かなかったが、深呼吸して一息入れたつもりにな

って、はっきりと伝えた。

「尋、柳 尋だ」

『では、尋、貴方に幸運があらんことを』

その声とともに、また俺の意識は次第にフェードアウトしていった。

こうして俺の戦いは始まった。

二話（前書き）

この物語はフィクションです。

二話

目を覚ますと辺り一面に木が生えていた。

きつと此処は森か林の中なのだろう。

自分の姿を見ると、木に背中を預けた姿勢で座っていた。

服装は白い無地の長袖Tシャツ、青いジーンズ、白を基調としたスニーカー、自分の普段着だった。

ただ一つ、左手首の銀色に輝く腕輪だけは知らなかった。

立ち上り、空を見上げると太陽が覗いているので、今は朝か昼だと判断する。

まさか、何の説明も無しに森林の中に置き去りされるとは。

（待つべきか、動いてみるべきか。

どうしよう？）

そんなことを考え始めた途端、腕輪が青色に光った。

深く考えずに腕輪に触ってみると、目の前に手の平サイズの妖精か何かが、いきなり現れた。

その妖精（？）は黒髪 of ツインテールで、レースをあしらった白いワンピースを着ている。

そして、薄緑色の燐光を放っていた。

『初めまして、ナビゲーターの星奈です。』

これから、宜しく願います』

「よ、宜しく願います」

思わず、咄嗟に答えてしまった。

こっちから質問しようとする前に、勝手に話し始めた。

『ルールの説明がありますので、腕輪に触れて下さい。』

あっ、時間が無いので、質問は後から纏めてお願いします』

色々聞きたいことがあったが、後から答えてくれるみたいだし、無視してルールを聞き逃すのが嫌だったので腕輪に触れる。

すると、音も無く目の前にウインドウが開き、機械音声が聞こえ

てきた。



ルール

共通

最後の一人となった者は、願いを一つだけ叶えられることができます。

プレイヤーには特別な力と便利な機能を備えている腕輪型の装置が与えられます。

共闘、闇討ち、何でも自由です。

失格の条件は、本人によるリタイア宣言、戦闘不能になる、ルール違反となっています。

今回は参加者が多く、予選、本選と分かれています。

予選の内容は、バッチ集めです。

バッチは、プレイヤーを倒すことでのみ入手出来ます。

期間は十日で、一人五個以上集めて下さい。

期間以内に本選への出場者枠が全て決まった場合、期間以内にバッチを集められなかった場合は失格となります。

本選の内容は、最後の一人が決まるまでのバトルロイヤルです。

個別

『一』サーチ機能について

半径一キロメートル以内に戦闘中のプレイヤーが居れば、腕輪から自動的に連絡が有ります。

『二』共闘について

まずは、共闘したい相手の名前と顔を認識して下さい。

そして、お互いが望めば、何時でも何処でも共闘することが出来ます。

共闘状態を解除する場合は、お互いが望めば、直ぐに解除することが出来ます。

ただし、片一方だけが望んでいる場合は二時間経つまでは共闘状態を解除することが出来ません。

『三』不明

『四』不明

『五』不明

『六』不明

『七』不明

『八』エネミーについて

フィールド内をエネミーがうろついて居ます。

基本的にはプレイヤーから仕掛けない限りは、襲って来ることは有りません。

倒すと役に立つ何かが貰えるかも知れません。



『なお、分からないことがあれば、ナビゲーターに聞いて下さい。それでは、力と知恵を振り絞り、願いを叶えて下さい』

その言葉とともにウインドウは閉じた。

『質問はありますか？』

不親切過ぎるルールの所為で何から質問したら良いか分からない。
早速、知恵を振り絞ることになりそうだった。

「他のプレイヤーについて知りたい」

『他のプレイヤーは貴方と同じで、試練を受けた人のことです』

自分一人だけの試練だと思っていたが、どうやら違うみたいだ。
「俺と似たような境遇の奴が一杯居るのか？」

『基本的にはランダムで選ばれます。』

ただ、貴方は不幸な身の上だったので、優先的に選ばれました。
しかし、他の方の境遇や願いは教えられません』

もしかしたら、似たような境遇の人も居るかも知れない、と。

（後悔するって、こういうことか……）

だけど、折角のチャンスを諦める訳にはいかない）

気持ちを改めて、他のことを聞いた。

「先程のルールは、また見れるのか？」

『はい。腕輪の機能で見れます』

あの短時間でルールを覚えるのは不可能だった。

もし、無理と言われていたら、諦めていたかも知れない。

『では、腕輪の機能を説明します。』

システムとしての連絡は青色の光、サーチ機能としての連絡は赤色の光を放ちます。

基本は、持ち主が腕輪を手で触れてからでないと機能しません。

操作方法は、手を使ったタッチパネル式の仮想デスクトップと、
思考を使う脳内映像の好きな方を選べますのです。

初期設定は仮想デスクトップです。

基本機能はステータス、アビリティ、アイテム、ルールです。

腕輪の説明は以上ですので、希望の操作方法を教えて下さい』

一気に説明された腕輪の機能を何とか、理解する。

「操作方法は仮想デスクトップでお願い。」

操作に慣れたいから、質問は後でしたい」

脳内映像だと、動きながらの操作が難しいと思い、仮想デスクトップにした。

『分かりました。』

このまま待機してますので、質問があれば声を掛けて下さい』
その言葉に頷きながら、腕輪に触れる。

先程と同じで、音も無くウインドウが開いた。
そして、ステータスから順番に触れていった。



ステータス

日付 1日目

時刻 10…15…05

人数 337人

バッチ 1個

アビリティ

シールド

他人の目には見えないシールドを作り出せる。

強度や規模は使用者に左右される。

強化

自分や他人の力を強化する。

身体能力、自然治癒力も高めることが出来る。

汎用性は高いが、複数に使用出来ない。

アイテム

応急セット（絆創膏、包帯、ガーゼ、消毒液）



ルールは先程と変わらなかった。

「星奈、個別ルールについて聞きたい」

『書かれている以上のことは知りません。』

他のプレイヤーと情報交換すれば判明します』

「難しそうだけど、情報交換は、お互いにメリットが有るし大丈夫かな」

そういえば、個別ルールに気になる情報があった。

「エネミーって？」

『エネミーはプレイヤー以外の生物全てです』

「生物全てか。」

となると、ナビゲーターも？」

『ナビゲーターはシステムの一部で、他のグループプレイヤーからは見えません』

「他のグループ？」

また、説明されていないことが出て来た。

『ナビゲーターは何人もプレイヤーを担当しています。』

私は今回が初仕事なので、十人程しか任されてません。

そして、基本的な情報しか知りません』

「もしかして、ナビゲーターに優劣があるのか？」

『いいえ、貴方が新しい情報や物を手に入れば、私も学習します。それに、情報面で不利な代わりに有利なアビリティが与えられています』

一応は平等になっているのか。

（残るは一番大事な力のことを聞かないとな）

「力はどうやったら使える？」

『イメージして下さい』

少し待っても、それ以上の説明はされない。

（イメージね。

簡単なようで難しそうだ）

「エネミーも居るし、ファンタジーだな」

『ええ、願いを叶える試練の為にある非現実世界ですから。

夢かゲームの中に居るとでも思ってた下さると分かり易いです。

疲労は感じますが、空腹になったり、排泄は必要ありません』

食事のことは、考えつかなかった。

まあ、いきなりサバイバルしろ、なんて言われても無理だったの
で、非常に助かったが。

気になったことを一通り聞いたら、この時を待っていたかのように
腕輪が赤色に光った。

三話（前書き）

この物語はフィクションです。

三話

辺りを三十分程探し回ったが、誰にも遭遇しなかった。

『逆方向だったのかも知れませんか』

「せめて方向だけでも分かれば良いんだけどな」

赤色に光ったを確認して直ぐさま腕輪に触ったのだが、何も反応せず一分程光り続けた後、消えたのだった。

徒労に終わった所為で余計に疲れた気がする。

木に寄り掛かって休もうとしたのだが、右から鋭い視線を感じ取った。

直ぐさま振り向くと、前足を動かし、今にも突進してきそうな猪を視界に捉える。

転がるようにして木の陰に隠れたその直ぐ横を、猪が勢い良く通り過ぎて行った。

「くそっ、何でいきなり襲ってくるんだよ」

何もしていないのに関わらず、いきなりエネミーに狙われて悪態をつく。

『もしかしたら、直前まで戦闘してたのかも知れません』

「探してた奴と、か？」

『憶測ですけど』

木の陰から覗いて見ると、また前足を動かしていた。

どうやら会話をしている間に、方向転換を終えたみたいだ。

「ぶっつけ本番だけど、やるしかないか」

再度の突進をまた木の陰でやり過ごし、そこから飛び出す。

まず、身体能力を強化するイメージをしたが、曖昧過ぎて無理だった。

今度は五感を強化するイメージをする。

上手くいったようで、視野が広がり、足音がはっきりと聞こえ、土や木の臭いに混じり獣の臭いも嗅ぎ取れるようになり、敵意を肌

で感じ取れるようになった。

そして、目の前に壁を作る、いや有るとイメージする。

大きさは二メートル四方、強度はとにかく硬く。

イメージ通りに作り終えた途端、猪が真正面からシールドに突っ込んで来た。

凄まじい衝撃音に思わず、しゃがみ込みながら耳を塞ぐ。

立ち上がりつつ辺りを見回したのだが、いつの間にか猪が消えていた。

（何処に行った？）

不思議に思っていると、腕輪が青色に光った。

触って起動させると、アイテムの所に新しく何かが追加されていた。

「何だろ、えっと、腕輪機能向上セット？」

いつの間にか猪が消え、アイテムが増えたことに頭を悩ませていると、星奈から説明が入る。

『先程、エネミーを倒したので、運良く入手したですよ』

確かに、エネミーのルールに書いてあった。

「さっきの猪は消えたんじゃないくて、倒したのか」

どのくらいの度速だったかは分からないが、頭から勢い良く壁にぶつかったのだ、死んでもおかしくは無かった。

「これって、持ってるだけで良いのか？」

それとも使わないと駄目なのか？」

『使わないと効果が有りません』

その言葉を聞き、早速使ってみた。



音声ショートカット機能追加

腕輪を触らなくても音声だけで起動、アイテムを使用出来る。

サーチ機能拡張

赤色に光っている内に腕輪を起動させると、その時点での方角が分かります。



「おお、便利な機能が追加された」

『あの程度のエネミーから入手出来るものでは、一番良い物ですね』
会話をしていると、背後から木の枝が折れる小さい音がした。

「誰だっ!？」

その言葉とともに警戒しながら、振り向く。

そこには、驚きと怯えが半々といった表情の少女が木に手をついて、こちらの様子を伺っていた。

「怖がらなくて良いよ。」

危害を加えるつもりは無いから」

優しい口調で言葉を掛けたのだが、返事は無く、木の陰に隠れてしまった。

「いきなり誰かが後ろに居て、こっちも驚いただけだから」

もう一度話し掛けると、木の陰から顔を見せてくれた。

「どうして此处に？」

偶然通り掛かったというよりは、辺りを気にしていた様に感じられ、少女に質問した。

まだ少し怯えた表情をしていたが、今度は返事をしてくれた。

「少し前に大きな音が聞こえたので、気になって見に来ました」

あれだけ大きな音がすれば誰かが見に来るのは、考えればすぐに辿り着く答えだった。

あの時、腕輪が光らなければ、きっとこの場所から離れていた。

「とりあえず、此处から離れよう」

そう言って、少女の手を掴み走り出す。

少女は何か言いたそうに口を開きかけたが、結局何も言わず、俯

きながら素直に着いて来た。

前だけを見ていたので、少女の頬がうっすらと赤くなっているのに気付かなかった。

そして、この時の判断は事実的には正しくて、結果的には間違いだった。

二十分程無言で走り続けた。

「これくらいで大丈夫かな？」

「ごめんね、いきなりで」

結構なペースで走った所為で、頬が上気しているのであろう少女に謝る。

「いえ、あの」

少女はそう言って俯いてしまった。

先程は少女を見る暇が無かったが、改めてみると綺麗な少女だった。

目や鼻立ちはすっきりとしていて、口は薄く、色白で線の細い儂げな印象が、森の中に居ること増していた。

少しウェーブ気味の艶のある黒髪は腰に届くぐらい長さ。

胸元の黒リボンがアクセントになっている淡い水色のフリルブラウス、同系色で膝上丈のフレアスカート、靴はピンクのヒールスニーカー。

その服装は少女にとっても似合っていて、思わず見取れてしまった。

「あの、そんなに凝視されると恥ずかしいです」

少女に言われて気付き、慌てて謝る。

「ごっ、ごめん。

君が可愛かったから、つい……」

「あ、う、その……」

ありがとうございます」

小さな声でお礼を言った少女の顔は、かなり真っ赤になっていた。少しの間、気まずい沈黙が流れた。

その沈黙は少女からの質問で破られる。

「どうして、あの場所から離れたのですか？」

「人が沢山集まると、収集がつかなくて、争いが始まりそうだったからだよ」

「そうですか。」

でも、その心配はいりませんでしたよ」

そう言い切った少女の顔は自信がありそうだった。

「そういうルールがあったのかな？」

お互いの知っているルールの情報交換しない？」

「はい」

そうして、ルールを教え合った。



『四』 共闘のデメリットについて

ステータス、アビリティ、アイテムが共闘者も閲覧出来るようになります。

負けの条件に、共闘者も含まれるようになります。

『六』 戦闘時間について

ゲームが始まってから、朝七時から、戦闘禁止区域に入ってから二時間以内の間は戦闘行為を禁止しています。

このルールを破れば失格となります。



少女から教えて貰ったルールを見て納得する。

「確かに、このルールを知っていれば、争いは起こらなかったね」

「はい。」

それで、期限付きでも良いので、私と共闘して下さいませんか？」

いきなりの申し出に面食らう。

「そんな簡単に決めて大丈夫？」

今の所、デメリットしか分からないのに共闘して良いの？」

「大丈夫です」

そう言った少女の顔に迷いは無かった。

「理由を聞いても良い？」

「デメリットさえ分かれば、それ以上の悪いことは無いと思います。それに、同じナビゲーターだったからです」

少女が腕輪に触ると、星奈が二体が増えた。

とても驚いた顔を見ると、その表情を見た少女が笑う。

その笑顔は先程の儚げな印象とがらりと変わり、向日葵のようだった。

また見取れそうになり、不自然にならないように言葉を返す。

「一番最初に出会った人が同じナビゲーターって、凄い偶然だね」

「私もそう感じたので、共闘しようと思いました」

そのやり取りで答えは決まった。

「柳 尋。」

宜しく、名前で呼んで良いから」

「紅林 美紗です。」

なら、私も名前でお願いします」

「美紗で良いかな？」

それと敬語は止めて良いよ」

「はい……じゃなくて、うん。」

宜しくね、尋君」

こうして二人は共闘者になった。

四話（前書き）

この物語はフィクションです。

四話

「星奈が二人居るのは何か変な感じがする」

「変というか違和感みたいなのがあるよね」

元から居たのは二人の目の前に浮かび、次に現れたのは美紗の肩の上に腰掛けている。

『では、一人になりましょうか？』

二人の星奈が同時に喋る。

「あゝ、お願い」

「なら、私からも」

二人の答えを聞くと、肩の上に腰掛けている方が次第に薄くなり消えた。

「さてと、今後の方針を決めようか」

「その前にお互いの能力とか把握しとこうよ」

「そっちからやった方が決めやすいか」

二人は腕輪を触って起動させ、お互いのアビリティを確認する。



風

風を操ることが出来る。

無風状態では使えない。



「美紗の能力は使い易そうだね」

「そうかな、無風だと使えないよ？」

その言葉に美紗は首をちょこっと傾けながら答えた。

「わざわざ無風って書いてあるから、手や足を動かしただけの微風

でも使えると思うけど？」

「どうして分かったの？」

私は無風の時に手を動かして、偶然気付いただけだよ」

驚いた表情をしつつ、美紗は感心していた。

「んー、ルール説明とかが不親切なのは、自分で考えろってことなんだと思う。」

だから、無風っていうのはヒントだったんじゃないか、って思ったんだ」

その言葉を聞いて、美紗は思い出すような仕草をする。

「そういえば最初に、力と知恵を振り絞り、って言ってたね」

「だから、ルールには抜け道や落とし穴があると思う」

「そうだね、気を付けないと。」

それで、尋君の能力は二つも有るけど、何かしたの？」

早速疑って来たことに、尋は笑いながら否定する。

「違うよ、これは元から二つ持ってたんだ。」

でも、さっきアイテムを手に入れて使ったよ」

「そっかあ。」

それで、何が手に入ったの？」

興味津々といった感じで美紗は聞いた。

「触らずに腕輪を音声で起動出来る機能、サーチで方角が分かる機能」

「便利そう。」

そういえば、戦闘禁止なのに、エネミー倒したの？」

「倒したというか、能力で壁を作って、そこに猪が突進して自滅した。」

って感じかな」

「正当防衛ってこと？」

首を傾げつつ聞いた美紗に、考えながら尋は答える。

「どうだろう、能力が防御だったから攻撃と判断されなかったのかもね」

「ところで、エネミーって動物なの？」

「俺が遭遇したのは動物だったけど、詳しくは分からない」

その質問に尋は首を振った。

「モンスターみたいな想像してた。」

どうしよう、犬や猫だったら攻撃出来ないかも……」

その言葉を聞いた尋は、不安に思い、少し尖った口調で尋ねる。

「あのさ、攻撃系の能力じゃない俺が言うのは間違ってるかも知れないけど、それで人に攻撃出来るの？」

その質問に美紗は震えた声で話し出す。

「そんなこと、分からないよ。」

一人のままじゃ無理かも、って感じたから共闘しようと思ったの。尋君から、エネミーの話聞いた時、少しずつ慣れていこう、って考えを変えることにした。

けど、モンスターじゃなくて、動物だったら人と変わらないよお

……」

そう言って美紗は泣き出し、座り込んでしまった。

その様子を見た尋は、自分を呪いたくなった。

そのまま美紗の泣いている姿を見ているのが辛くなり、尋はそつと抱きしめ、優しく頭を撫でる。

「ごめん、美紗の気持ちを少しも考えて無かった。」

俺の能力はあれだからさ、攻撃出来る能力の美紗と共闘出来て良かったと思っただ。

その気持ちの中にはきつと、自分で人を傷つけないで済む、って身勝手な思いが少なからずあった。

だから、美紗が戦えないみたいなのを言ったから、不安になつて責めるようなことを言ってしまったんだ。

美紗の心を傷つけて、ただ謝っただけで赦されるとは思えないけど、ごめんなさい」

そう締めくくり、美紗からゆっくりと離れ、尋は土下座をした。

そのまま少し経ち、何処からか低い唸り声が聞こえてきた。

「くそっ、なんでこんな時に」

そう良いながら、尋は立ち上がり五感を強化する。

強化された聴力と視力のお陰で、それに気付くことが出来た。

大きさは二メートル四方、強度は何よりも硬く。

「美紗っ！！」

それは美紗の背後に素早い動きで迫って来る。

能力が間に合い、鋭い爪による攻撃は美紗には届かなかった。

見えない壁に阻まれ、強襲に失敗したそれ——狼は距離を取る。

突然の状況変化に付いて行けず、困惑している美紗を庇う為、尋は前に出た。

その行為に対するかの様に、先程の狼の後ろから四匹の狼が姿を現した。

そのまま狼達は半円を描くように二人を包囲する。

尋は何時でも能力で壁を作れるように、集中し始めた。

最初は目の前の狼が攻めて来る。

それを尋は素早く作った壁でその行動を阻む、その視界の右端に別の狼が動いたのが見えた。

同じように壁を作り、行動を阻む。

そうして視界に映った狼達の行動を次々に阻んでいった。

このままでは無理だと思ったが、立ち上がる事が出来ない美紗は、静かに尋の邪魔にならないように声を掛ける。

「尋君、このままだと……」

「大丈夫、攻撃が無意味だと分かれば、狼達も居なくなるさ」

それはただの願望だったが、美紗に攻撃させる訳にはいかなかった。

しかし、尋にもこのままではじり貧だということは、分かっていた。

（作っているのが壁だから、いちいち相手を見て作らないといけな

なら、ドーム状のバリアをイメージすれば……？)

そう考え、狼達の攻撃に隙が出来るを待つ。

程なくして、狼達の攻撃が止まり、半円の包囲に戻った。

それを確認し、新たなシールドをイメージする。

大きさはなく、半径は俺を中心とした三メートルでドーム状、強度は何よりも硬く。

そうイメージした瞬間、今まで味わったことが無い頭痛がして、倒れそうになった。

何とか踏ん張って耐え、深呼吸する。

明らかな隙に何もして来ない狼達を不思議に思い、尋は前を見た。その瞬間、狼達は一斉に上を向き吠える。

慌ててもう一度イメージするが先程と同じ頭痛がして、あと少しのところで、上手くいかなく失敗した。

そうしている内に、さっきの声に呼び寄せられ、新たに狼が五匹現れる。

そのまま包囲の輪に加わっていき、さっきの半円と違い、今度は完全に包囲された。

その様子を見て、諦めずに三度、イメージする。

半径は俺を中心とした三メートルでドーム状、強度は何よりも硬く。

相変わらず、頭痛はしていたが今度は成功した。

その瞬間、狼達が一斉に襲い掛かって来たが、バリアに阻まれて攻撃は届かない。

今度は入れ替わり立ち替わり、様々な場所から攻めて来るが、攻撃は全く届かない。

しかし、バリアを維持している間も頭痛が続いてる尋は、今にも倒れそうだった。

その様子を見て、美紗は立ち上がった。

後ろで美紗が立ち上がったのを感じ取った尋は、優しく声を掛ける。

「無理しなくて良いから」

「尋君だけ辛い思いをしているのに、私だけが怯えてられないよ」
振り向き、美紗の真剣な表情を見た尋は頷く。

「分かった」

「このバリアみたいなのがある所為で、私の能力が狼達が居る外には使えないみたい。」

「だから、私が合図すると同時に消して欲しい」

それは、防御するのを止めて、狼達の攻撃に無防備になるということだった。

迷っている尋の目を見詰め、美紗はもう一度お願いする。

「お願い、私を信じてバリアを消して欲しい」

「ごめん。」

さつき、分かったって言ったばかりなのに」

その言葉を聞いた美紗は、悲しそうに顔を伏せた。

「だから、美紗を信じる」

その言葉を聞いた美紗は、お礼を言う。

「ありがとう。」

三カウントで良い？」

「全て任せる」

「分かった。」

三、二、一、今！！」

タイミングを合わせ、バリアを解く。

すると、美紗を中心に風が集まっていく。

「行っけえー！！」

その言葉とともに集まっていた風が狼達に向かっていった。

風に触れた狼達はカマイタチの様な傷が次々と刻まれていき、体中から血を噴き出し、苦痛そうな声を出しながら倒れていく。

倒れていった狼達は、跡形も無く消えた。

「うっ……」

狼達を見ていた尋は、その声を聞き、口を押さえてうずくまる美

紗を見た。

「起動、アイテム、ガーゼ。」

本当はハンカチがあれば良かったんだけど……」

そう言ってガーゼを美紗に渡しながら、尋は背中を摩る。

そのまま短くない時間が流れ、美紗が口を開く。

「ありがとう。」

ごめんね」

「こっちこそ、ありがとう。」

そして、無理させてごめん」

二人してお礼と謝罪をしつつ、初めての戦闘を終えた。

その様子を遠くから双眼鏡で眺めている男が居た。

「ふむ、こんな短時間で自力で能力を進化させたのか。」

厄介な相手になるかも知れないな、今の内に始末するべきか……。

いや、上手く誘導してあの化け物の相手をさせた方が良いか。

あの化け物を作り出した責任の一端は彼にあるのだから……」

その男の不穏な言葉は、誰の耳にも届くことは無かった。

五話（前書き）

この物語はフィクションです。

五話

数分間、お互いに身体を休めていると、尋が呟く。

「そういえば、戦闘禁止時間過ぎてた？」

「あっ、確認してない」

その言葉を聞いて、尋は腕輪を起動させた。



ステータス

日付 1日目

時刻 12:07:43

人数 303人

バッチ 2個



「ギリギリって所か。」

それよりもバッチの数が増えてる方が問題だな」

「そうだね、プレイヤーからしか入手出来ないルールなのに……」

「美紗はあの時にステータス確認しなかった？」

「ごめん。アビリティしか見てなかった」

「いや、別に責めてる訳じゃない。」

俺も確認しなかったし」

二人が悩んでいる所に星奈が声を掛ける。

『バッチは猪倒した時に入手してます。』

それと、腕輪が光ったのに気付いてない様なので、美紗はアイテム確認した方が良いでしょうね』

星奈の言葉に尋は頭を悩ませる。

「色々と質問があるけど、まずは美紗のアイテムを確認しとこうか」
その言葉を聞いた美紗は急いで腕輪を起動させ、アイテムを確認する。

応急セットの他にランプが追加されていた。

「ランプ？」

「うん。これなら夜になっても大丈夫そうだね」

その言葉に頷きつつ、尋は星奈に尋ねる。

「星奈、使用限界みたいなのは有るのか？」

『有りません。』

照らす範囲は大体、所有者から二メートル弱です』

「ランプってことは、据え置き？」

『いえ、手提げです。』

それに、いちいち取り出さずとも、持っているだけで機能します』

「それは便利だな。」

あっ、美紗は何か質問有る？」

自分ばかりが質問していたことに気付き、尋は美紗に尋ねた。

「ランプは尋君が聞いてくれたから大丈夫。」

知りたいのはエネミーのことかな」

「分かった。」

今度は美紗が質問したら良いよ」

「ありがとう。」

エネミーについて基本的なことじゃなく、例外を知りたい」

『エネミーから攻撃される原因ですね。』

プレイヤーが縄張りに踏み込む、他のプレイヤーとの戦闘中に敵と認識される、アクティブなエネミーと遭遇する。

以上です』

星奈の説明に美紗は更に尋ねる。

「もう少し詳しく聞きたいな」

『縄張りとは、獣道や巣に入る。』

敵と認識されるのは、エネミーの視界や感覚内に入る。
アクティブなエネミーは、奥深くに居ますし強いです』

「ありがとう。」

それと、エネミーはバッチ持ってないよね？」

『基本的には持ってないです。』

例外としてプレイヤーを倒したエネミーが持ってます』

その言葉で、尋は何故バッチが増えていたのか理解する。

「つまり、あの猪は他のプレイヤーと戦闘、そのプレイヤーは倒されたかルール違反で失格、猪がバッチを入手、その猪に遭遇し戦闘、無事に倒してバッチ入手。

ってことか」

「多分、それが正解だね」

尋の推理に美紗は頷いた。

『他に質問はありますか？』

その言葉に美紗が首を横に振ったのを見て、尋が質問する。

「強いエネミーは見た目で判断出来るのか？」

『はい、出来ます。』

弱いエネミーは動物、強いエネミーはモンスターの外見をしてます』

「動物みたいな外見のモンスターは？」

『居ますよ。』

ですから、能力が上手く使えない内は、強いエネミーが居る奥深くには行かない方が良いです。

良いアイテムが欲しいのなら別ですけど』

「やっぱり、強いエネミーは良いアイテム持ってるのか？」

その回答に納得しつつ、尋は尋ねた。

『持ってますけど、最低でも二桁程度は倒さないと良いアイテムを入手するのは難しいです』

「成る程、アイテムの入手しにくさは変わらないのか。」

質問はこんな所か？」

そう言った尋に美紗が声を掛ける。

「尋君、大事なこと聞き忘れてるよ」

「大事なこと？」

「何故、私達がエネミーに襲われたか、だよ。」

大体、察しはついてるけどね」

周りを見渡ししながら言った美紗に、尋は頷いた。

「此処が獣道だから。」

いつの間にか走り易い道を通ってたんだな」

今居る場所を改めて見渡すと、足元の落ち葉や草が踏み固められて道が出来ていた。

只、道といっても七、八メートル程の幅があり、一目では分かりにくかった。

「でも、獣道にしては広い気がするよ？」

「あまり考えたくないけど、このサイズのエネミーが居るってことだろうね」

その言葉に美紗は嫌そうな顔をした。

「なら、遭遇する前に移動しようよ」

「そうだね」

そう言って移動しようとした途端、二人の腕輪が赤く光った。直ぐさま腕輪を起動し、方角を確認した尋は困った顔をする。

「この獣道の奥を示してるけど、どうする？」

「とりあえず、様子だけでも見に行こう」

「分かった」

二人は獣道の奥に向かって走り出した。

所々曲がりくねった獣道を並走しながら二十分近く走る。

すると、獣の唸り声が遠くから聞こえて来た。

声のした方角が獣道から外れていたのが、走り出す前に五感を強化していた尋には分かった。

「ストップ。」

俺が前に行くから付いて来て」

そう言いながら前に出る尋に、立ち止まった美紗は頷く。

二人は先程よりもスピードを落としながら、慎重に声がした方へ近付いて行った。

奥に進むにつれて、木の密度が増え、上から日の光が届かなくなつて辺りが少しずつ暗くなる。

そして足元の草は伸びていき、進みにくくなっていく。

腰近くまで伸びた草を掻き分けつつ近付いて行くと、狼がケンタウロスに襲い掛かっている光景が目に入った。

その光景を見た尋は、星奈に小声で尋ねる。

「星奈、エネミー同士が自らの意思で戦うことは有り得るのか？」

『有り得ません。』

多分、何かに操られている筈です』

その回答を聞いて尋は辺りを見渡した。

「何か分かった？」

「五感を強化しても、誰の姿も見えないし、分からない」

「五感じゃなくて、視覚だけ強化してみたら？」

そのアドバイスを聞いた尋は、五感ではなく視覚だけを強化して、もう一度辺りを見渡した。

五感から視角だけにした途端、先程より鮮明に見える様になっている。

十五メートル程先で戦っているエネミー達の更に奥、三十メートル程の位置に木の陰に隠れる様にして男が居た。

暗くて服装は分からなかったが、背格好からして歳はそれ程離れていない様に見える。

それに、たまに口が動いている気がする、ということを美紗に伝えた。

「ねえ、これからどう動くの？」

「とりあえずは、このまま様子見で。」

場合によっては助太刀するか、急いで逃げよう」

「それで良いの？」

「美紗は大丈夫なのか？」

口に出さなかった、攻撃することに対する忌避感への疑問は美紗に伝わった様で、何も言わず首を横に振った。

その様なやり取りの後、戦闘中のエネミー達に視線を向けた。

ケンタウロスは素手で、周りを警戒する様に立っている。

狼の姿は草の所為で見えないが、動く草が揺れるので分かり易い。

草が揺れるとそこへケンタウロスが前足による踏み付けをするが、狼を捉えることが出来ない。

そこへ攻撃を回避した狼が右前足に噛み付く、ケンタウロスは前足を動かして狼を振り落とそうとしつつ、腕で捕らえようとする。

しかし、狼は前足を動かしている勢いを借りる様にして離れ腕から逃げた。

また草が揺れたがケンタウロスは急いで攻撃せず、今度は慎重に様子を窺っている。

そこへ狼が飛び掛かる、かと思いきや、その方向は木に向かっていた。

その木を蹴って三角跳びの様にしてケンタウロスの後足に襲い掛かり、爪で引き裂いた。

その様な攻撃が何度も繰り返して行われたのだろう、良く見るとケンタウロスは色々な所から出血していた。

「凄いね」

その呟きに尋は頷く。

「ああ、俺が相手をした狼とは動きが全然違うよ。

あんな動きをされたら、対応出来なかったと思う」

「うん、私も攻撃を当てる自信無いよ」

「誰かが操る、というか指示を出すだけで此処まで動きに違いが出るもののかな？」

考えるような尋の疑問に、美紗も首を傾げながら答える。

「どうだろう？

能力のお陰かも知れないよ？」

「そうだね、助太刀の必要も無いだろうし」

そんな会話をしている内に、ケンタウロスは次第に弱っていき、
為す術もなく狼の攻撃を受け続け、反撃すら出来ず、地に倒れ消え
ていった。

六話（前書き）

この物語はフィクションです。

六話

尋は狼がケンタウロスを倒したのを確認し、美紗に声を掛けようとした瞬間、狼を操っていた男から尖った声が掛かる。

「そこに隠れてる奴、出て来いよ」

驚いて声を出しそうになった美紗を制し、尋は自身の動揺を隠して一人だけ木の陰から姿を現す。

それに合わせるようにして男も木の陰から姿を現し、狼の右隣へと歩み寄って行く。

強化を視力から五感に戻し、尋は両手を上げながら男の方に近付いた。

五メートル程の距離を置いて二人は向かい合う。

「敵対するつもりは無いから安心して欲しい」

「敵対する気が無いのに姿を隠して覗いてた、って訳か？」

そう言った男は白のYシャツに黒のジャケットとスラックス、茶色のブーツという服装で金髪だった。

背格好から同じぐらいの歳だと思っていたが、どうやら男は大学生のようだった。

「戦闘中に声を掛けたら邪魔になるだろ」

「ちっ、口が回るみたいだな。」

で、大人しく出て来て、俺にバッチでもくれるのか？」

「いや、個別ルールの情報交換がしたい」

少し悩む様な仕草をし、男は頷く。

「情報交換か、良いぜ。」

で、何番だ？」

「『一』、『二』、『八』だ」

「俺は、『一』、『五』、『八』だ」

「お互い一つずつか」

「みたいだな」

お互いにルールを教え合った。



『五』フィールドについて

毎日、朝七時になるとフィールドがランダムで変化します。

変化時、現在位置が障害物の中だったりする等の場合は半径一キロメートル以内の場所に勝手に転移します。

もし、半径一キロメートル以内の場所も障害物の中だったりする等の場合は失格となります。



「情報交換は終わりだ。

この後は、バッチの奪い合いだな」

「いや、さっきも言っただろ？」

ルールが全部分かるまでは戦う気はない」

「お前には無くとも、こっちには関係ねえ」

いきり立つ男に、尋は右手を上げて制止を求める。

「待てよ、戦闘に関するルールが有るかも知れないのに攻撃して良いのか？」

「そんな脅しが通用するかよ。

と書いてえけど、こっちは戦闘直後で疲れてるしな、見逃してやるよ」

「そうか、ありがとう」

そう言って尋は背を向けて歩き出す。

そこへ狼が飛び掛かり、左前足の爪で首を切り裂いた——かの様に見えたが、見えない壁に阻まれて尋は無事に済んだ。

必中だと思っていた狼の攻撃が失敗し、男は動揺して叫ぶ。

「何故分かった!？」

「狼の敵意というか殺気か？」

それがずっと肌に伝わってたからな」

攻撃する前と同じ位置に戻った狼を見て男は舌打ちし、忌々しそうに睨む。

「ちっ、使えない。」

ケンタウロス!!」

その言葉と同時に男を挟む様にして狼とは逆の位置に音も無く現れた。

嘲笑う様に口を歪めた男は、指示を出すとともに後ろに下がって行く。

「行けっ、奴をぶっ殺せ!!」

狼は回り込む様に移動、ケンタウロスは真っ直ぐにタックルを仕掛けて来た。

動揺していた尋は咄嗟に判断が出来ず、対処に遅れた。

「尋君」

その言葉とともに突風が吹き荒れ、二匹だけを吹き飛ばす。

「ありがとう、美紗。」

そのまま隠れて援護してくれると助かる」

「分かった、無理しないでね」

その言葉に尋は右手を上げて答えた。

「ちっ、仲間が隠れてやがったのか。」

油断ならねえな」

「さあ、どうする？」

「虚仮にされて引き下がれるかよ」

今度は先程と違い、二匹同時に攻めて来る。

また真っ直ぐにタックルを仕掛けて来たケンタウロスは、尋の作った壁にそのまま激突する。

草の中に隠れてしまっている狼は近い位置だと見付けにくく、対処出来なかった。

突風がまた狼を吹き飛ばし木に激突した、かと思われたが寸前で

体を捻り、足で衝撃を受け止め、その反動でこっちに飛び掛かって来る。

今度は姿がはっきりと見えていたので、壁を作って防御することが出来た。

「何だよ、その動きは。」

「厄介過ぎだろ」

狼が見せたとんでもない動きに対して尋は愚痴を漏らした。

壁と激突したケンタウロスが回復し、またタックルを仕掛けて来る。

懲りずに真っ直ぐに向かって来たので壁を作って、狼の方に集中した。

しかし、狼は何の動きも見せない。

「尋君、ケンタウロス!!」

その声につられて見ると、そのまま壁に激突したと思い込んでいたケンタウロスがジグザグと大きな動きで走り、迫って来ていた。壁を作る余裕は無かったので、尋は前方に身を投げ出す様に転がってその場から離れる。

が、ケンタウロスの左手に左足を捕まれ、そのまま一気に逆さ吊りにされてしまった。

ケンタウロスの残った右手が拳の形を作り、尋の顔面を目掛けて振り落とされる。

拳が当たるより早く突風がケンタウロスに向かって放たれた。

今度はただの風では無く、ケンタウロスの右腕を切り裂く。

ケンタウロスは苦悶の声を上げ尋を掴んでいた左手を離し、右腕を押さえた。

「痛っ」

受け身も取れず地面に激突して呻いた尋の顔に、いつの間にか近付いていた狼の右前足が迫って来る。

それをゴロゴロと転がって躲すが木にぶつかり、追い詰められてしまった。

左前足を振り上げた狼だったが、いきなり後ろに飛び下がる。

一拍遅れて突風が先程まで狼の居た場所に吹き荒れたが、草を刈るだけに終わった。

「美紗、悪いけど先にケンタウロスから倒したい」

複雑な動きをする狼より先に単純な動きのケンタウロスを倒した方がやり易い、と立ち上がりながら考えた尋は美紗にお願いした。

「大丈夫、分かった」

躊躇なく了承してくれた美紗に尋の心は痛んだ。

そこへ右腕をだらりと下げたケンタウロスがこっちへ向かって来る。

狼からの邪魔が入らない様にする為、尋は後ろに木を避けて一枚の大きな壁を作り、ケンタウロスに集中した。

ケンタウロスはいつの間にか木の枝、というよりは棍棒を左手に持っている。

どうやら木から無理矢理にもいだ様で、先の方は中の色が見えて不揃いで、手元の方は葉っぱがいっぱい付いていた。

人一人を片手で持ち上げることが出来るし、凄い臂力だと尋は改めて思い知った。

ケンタウロスが木の棍棒を振り上げるのを見て、尋は壁を作り防御する。

しかし、壁は木の棍棒に粉碎され、尋は慌ててしゃがみ込み直撃をなんとか避けた。

棍棒は後ろ壁に当たり、大きな穴を開け、その穴から狼がこちら側に入ってくる。

ケンタウロスは足元の尋を見て棍棒を振り上げた。

そこへ今までよりも強力な突風がケンタウロスを襲い、穴が空いた壁の向こう側へと吹き飛ばす。

突風で吹き飛ばされ転んだケンタウロスに、再度突風が襲い掛かり体中を切り裂いた。

ケンタウロスはかろうじて立ち上がったが、体中から血を噴き出

しながら地に倒れ、そのまま消えていく。

その最期はまるで狼と戦っていた時の再現の様だった。

ケンタウロスが消えたのを確認した尋は立ち上がり、狼の方へ向
き警戒する。

すると突然、狼がケンタウロスが居た方を見て、低い唸り声を発
した。

その声につられて木の陰に居た男が現れる。

「ちっ、こんな時に。」

おいお前、確か尋だったか？」

「だったら何だよ？」

「俺の名は、沢渡 颯太だ。」

覚えておけ、お前を倒すのは、この俺だからな」

そんな捨て台詞を吐いて男——颯太は、狼と共に脇目も振らず逃
げて行った。

七話（前書き）

この物語はフィクションです。

七話

颯太と狼が去った方を二分程眺めたが、戻って来る様子は無い。

「はぁ、疲れたぁ」

そう言って尋は、その場で腰を下ろした。

左側から草を掻き分ける音がして尋は振り向く。

そこには少し顔色が悪い美紗が居た。

その姿を見た尋は真っ先に謝る。

「ごめん、また辛い思いさせて……」

「ううん、大丈夫。」

ちよつと気持ち悪くなったただけだから、少し馴れたみたい」

強がっている美紗に尋は感謝する。

「そっか、ありがとう」

「それより怪我してない？」

「大丈夫、何ともない」

身体を動かしながら確認した尋を見て、美紗は胸を撫で下ろす。

「良かった」

「そういえば、美紗は何処に居たの？」

最初に居た場所からでは的確に支援することが出来ないことに気が付き、尋は尋ねた。

「木の上だよ」

「成る程。」

ん？ どうやって登ったの？」

「こうやって……」

そう言った美紗の身体が、ふわりと三十センチ程浮かぶ。

「本当に便利な能力だね」

「まだ、ゆっくりでしか動けないけどね」

その言葉通りに、美紗の身体がゆっくりと地面に着いた。

「さてと、そろそろ移動しようか」

「そうだね」

立ち上がる尋の背後で草が揺れる音がし、二人はそちらに目を向ける。

そこには、全高1メートル、全長3メートル、幅70センチは有りそうなサラマンダーが居た。

「うわっ、赤いトカゲ!!」

何だっけ？」

「サラマンダーだよ、尋君」

サラマンダーが舌を出すと、口の周りから火が零れる。

「いや、待て、待って。」

こんな所で火は駄目だって」

必死な声を出す尋を無視し、サラマンダーは息を吸い込んだ。止まる気配を微塵も感じられず、尋は急いで壁を作る。

大きさは五メートル四方、強度はとにかく硬く。

サラマンダーが口から勢い良く火を吐き、壁にぶつかった。

壁が見事に防いだかと思われたが、次第に溶け出し、さらに周りの草が燃え始める。

火が燃え広がらない様に、美紗の風が辺り一面の草を刈り取った。尋は重なり合う様に同じ壁をもう一枚作る。

しかし、火の勢いは止まらずに壁を溶かしていく。

突風が火を消そうと吹き荒れたが、多少揺らしただけで無意味に終わった。

更に壁を追加した時、漸くサラマンダーが火を吐くのを止める。

突風でサラマンダー自体を吹き飛ばそうとするが、びくともしなかった。

「どうするの？」

「俺の能力じゃ防げないみたいだし、逃げるか」

「どっちに逃げるの？」

獣道から此処まで来た方角はサラマンダーの横を通らないと戻れない。

かといって、先程颯太が逃げた方や、木が密集していて通るのに苦勞しそうな方には進めない。

奥の方へと進む、それしか選択は残っていなかった。

「奴と同じ方へは行けないから、奥に進もう」

「分かった」

そんな会話をしている間にサラマンダーがもう一度息を吸い込む。それを見た尋が慌てて壁を作ると同時に、美紗の風がサラマンダーにぶつかる。

サラマンダーにぶつかった風は、浅く皮膚を切り裂くだけに終わった。

「行こう」

「うん」

尋が先頭になって奥の方へと走り出す。

壁を溶かし終え、火が迫って来たが既に走り出していた二人には届かなかった。

既に届かないと分かったサラマンダーは、火を吐きながら二人を追いかけて走り出す。

壁で防いだり刈り取ったりして、火事にならないようしていたのだが、サラマンダーが移動した所為で、ついに草や木に火が移った。サラマンダーと共に火が周りの草や木を燃やしながら二人へと迫って来る。

「熱っ、美紗は大丈夫？」

「うん、風で防いでるから平気だよ」

美紗の服は纏っている風の所為で不自然に揺らめいていた。

「そっ、熱っ、か。」

「やっぱり便利だね」

「ごめんね、自分一人で精一杯」

二人は後ろを時折振り返り、サラマンダーと周りの火を見ながら走る。

火を吐きながら走っている所為か、サラマンダー自身は余り速く

無く徐々に差が開ていく。

しかし、火が燃え広がる速度は速く、二人の周りを取り囲み始めていた。

そこへサラマンダーが火を吐くのを止め、走るのに専念した途端、差がどんどんと縮まる。

二人は近付いて来る足音と火から逃れる為に、振り返りながら走るのを止めた。

すると、森の奥へと進んでいる筈だが、何故か二人の先に光が見えた。

二人は導かれる様に、光へ向かってひたすら全力で走る。

先に森を抜けた尋は、余りの明るさに目を瞑って立ち止まった。

そこへ後から走って来た美紗がぶつかり、二人とも転ぶ。

「痛って〜」

「こっちだって痛いよ。」

もう、いきなり止まらないでよね、尋君」

二人が立ち上がりながら前を向くと、そこには向こう側が見渡せられない程巨大な湖が広がっていた。

湖の中は青く澄み切っていて、太陽の光を反射し煌めいている。

二人がその光景に目を奪われていると、星奈から声が掛かる。

『戦闘禁止区域に入りましたので、気をつけて下さい』

声のした右側を向いた二人は、また目を奪われることになる。

そこには、こぢんまりとしたログハウスが建っていた。

「危険性は無いよな？」

『大丈夫です』

「なら、中に入って休みながら良いかな？」

「うん、私も休みたい」

二人は重い足取りでログハウスの中へと入っていった。

入って直ぐはダイニングキッチンとなっていて、左側にキッチン、真ん中寄りにテーブル一脚と椅子二脚、奥に扉が二枚。

左側のドアを開けると三点ユニットバスとなっているが、実際にはバスタブは無くシャワーのみ。

右側のドアを開けるとベッドルームなっていて、シングルサイズのベットが二台。

ログハウスの中が安全かどうか一通り確認した二人は、ダイニングキッチンに戻る。

「とりあえず、椅子に座って話そうか」

「うん」

「お疲れ様」

軽く頭を下げて尋がそう言うのと、美紗も同じ仕草で返す。

「お疲れ様」

「まずは戦闘禁止区域について詳しく聞きたいんだけど、良いかな？」

「良いよ、任せる」

その言葉に美紗は軽く頷いた。

「入ってから二時間は戦闘禁止、ってことは入って直ぐ出ても続くのか？」

『いいえ、中に居る間でも二時間過ぎれば無効、という意味です』

「じゃあ、エネミーが中に入ってくる可能性は？」

『有りません、しかし先程の様に操られている場合は有ります。』

ですが、戦闘禁止は適用されます』

尋は少しの間黙考し、美紗に話し掛ける。

「中で待ち伏せされる、以外は安全かな？」

「そうだね。相手だけは攻撃出来るかも知れないし」

『言い忘れてましたが、一度入って出ると、二時間以上経たなければ再度入れません』

「それなら居続けた方が安全だな。

けど、誰にも遭遇しない可能性が高いか」

「休憩、避難の時だけにした方が良いかもね」

美紗の言葉に尋は軽く頷いた。

「次はフィールドについてだけど……。」

次のフィールドをあらかじめ知ったりすることは出来ないのか？
その言葉に少し悩み、星奈は答える。

『分かりません』

「どっちの意味だ？」

『能力やアイテムで知ることが可能かも知れません。』

という意味で分かりません』

「しょうがない、か。」

フィールドについて何か聞きたいこと有る？」

尋は星奈が詳しくない、という事を思い出して溜息を付き、美紗に尋ねた。

「えっと、ね。」

フィールドが変わる時って、どういう感じなのかな？」

『光に飲み込まれて、光が収まると別のフィールドになっています。
意識が無くなったりはしません』

「私達に準備とかは要らないみたいだね」

「今の所は何も出来ないか」

その言葉に美紗は頷いた。

「と、これで話し合いは終わりかな。」

俺は後で大丈夫だから、先に汗とか流して来ると良いよ」

「でも、尋君は汚いよ？」

「汚い……」

「えっ？ あっ！？」

そういう意味じゃなくて……」

自分の失言に気付いて、両手を振って慌てて否定する美紗の様子に、尋は必死に笑いを噛み殺す。

「分かってるよ。」

確かに汚れてるから、俺が先に入ると中も汚くなるしね」

「じゃあ、お言葉に甘えて、先に使うね」

「ごゆっくり」

美紗は立ち上がって左の扉の中へと入って行く。

そのまま数分経ち、微かに水の音が聞こえて来る。

居た堪れなくなった尋はログハウスの中から抜け出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8328u/>

流れ星に願いを

2011年8月13日03時24分発行